2013 年 5 月 10 日・神奈川新聞「神奈川の文化時評」欄では

何かのきっかけで詩作　　文・柴田千晶

心の種火は消えることなく

何年も詩を書かずに過ごしていた人が、ある日、再び詩を書き始めることがある。詩は不思議だ。詩を書かずにいた長い時間も、心には種火のようなものが灯っていて、何かのきっかけにその種火が激しく燃え上がる。肉親の死もそのきっかけの一つ。

「点描画」（コールサック社）は木島章（横浜市鶴見区在住）の第 1 詩集。作者は 50 代。家族との関係が誠実に描かれている。その真面目さが清清しい。

コップの水に墨をすこしずつ流し入れると／墨滴はゆらゆらとクラゲのように舞いながら／水底に漆黒（しつこく）の澱（おり）を積もらせてゆく／病とは、そのようにして／人を完全な死へと染めあげる／父は病院からの帰りみち／僕に向かってそうつぶやいた（「墨」冒頭）

墨をすることを日課とした父は、けっきょく一文字も記さずに死を迎える。〈ボロボロになった硯を唯一の形見にして〉。父の最後の言葉を、木島は自らの人生の中で知るだろうと予感する。日常の何でもない瞬間こそが、かけがえのない瞬間であるとこの詩集は示している。反原発を唱えた「にわか」からは、そのかけがえのない瞬間を奪うものは決して認めない、という思いが伝わってくる。社会への憤りも詩を書くきっかけの一つとなる。

と紹介されています。